

交通アクセス

路線	駅名	バス路線	所要時間	備考
JR 京都駅	京都駅	地下鉄 12分		
		北大路駅	10分	徒歩3分
京都市バス	京都駅前	205 (B3のりば) 循環	40分	徒歩3分
		206 (A3のりば) 循環		
		101 (B2のりば) 金閣寺行		
阪急 大宮駅	四條大宮	6 玄塚行	20分	徒歩3分
		46 上賀茂神社行		
		206 北大路バスターミナル行	20分	
JR・地下鉄 二条駅	一条駅前	6 玄塚行	15分	徒歩3分
		46 上賀茂神社行		
		206 北大路バスターミナル行	15分	
JR 円町駅	西ノ京円町	204 北大路バスターミナル行	15分	徒歩3分
		205 北大路バスターミナル行		
京阪 出町柳駅	出町柳駅前	1 西賀茂車庫行	20分	徒歩3分
		102 金閣寺行	20分	

佛敎大学紫野キャンパス



キャンパスマップ



※下記のホームページでも御覧いただけます。

「佛敎大学 紫野キャンパス アクセス／キャンパスマップ」
 (www.bukkyo-u.ac.jp/about/access/murasakino)

※本案内は仏敎文学会ホームページ

(<http://bukkyoubun.jp/>) にも掲載しております。

《シンポジウム》「講式研究のセカンドステージへ」

講式研究は筑土鈴寛氏以来の長い歴史を有するが、近年、殊に今世紀以降の研究の起点をなすのは、以下の二つであろう。まずは九十年代における山田昭全氏を中心とする講式研究会の活動であり、それは今世紀始めの二〇〇〇年に刊行された『貞慶講式集』に結実した。

次は講式研究会のメンバーでもあったニールス・グユルベルク氏が、ほぼ独力で構築した「講式データベース」であり、一九九七年に運用が開始され、アップデートを繰り返しながら現在なお進化を続けている。これらの成果は今や講式研究に不可欠と思われる。

さて講式研究は上記の如き成果を受けて更に蓄積を重ねつつあるが、この辺りで一度、今世紀以降の研究進展の総括や、残されている課題の剔抉、そしてそこから導かれてくる今後の研究の方向性などについて、考えてみるのも良いのではないだろうか。それが本シンポを開催する動機である。そしてこのことは、講式研究が内包する可能性や射程を拓いてゆくということを考慮するとき、文学という領域でのみなされるべきではなく、学際的な形で行われるべき作業であると考ええる。そのため中世文学・仏教学・歴史（民俗）学という多彩な分野からパネラーを招請した。この三氏の報告を受けて、聊か大風呂敷を広げるようではあるが「講式研究のセカンドステージ」について、会場の皆さまと共に考えてみたい。（船田淳一）

*

*

*

澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として―

柴 佳世乃

澄憲（一一二六～一二〇三）の手に成る七段の『如意輪講式』が今に伝わる。唱導で名高い安居院澄憲が、奥州平泉の藤原秀衡母の求めに応じて作成したものといひ、澄憲が自ら播磨の書写山に二七日（十四日間）籠って作ったとの伝承を持つ。

この『如意輪講式』の平泉との関係、およびその美麗な文章の価値は夙に注目されていたが、近時これを法要として復元実唱する営みがなされた。私もその委員として加わり、二〇一六年六月二六日、中尊寺において「如意輪講式」（三段式）の法要が勤修された。本プロジェクトは、書記された言語を現代に音声として甦らせる試みであり、全段実唱の法要に向けて、今なお継続している。

本発表では、右の『如意輪講式』復元実唱の過程で浮かび上がった本講式の特色や位相を、その伝来や文章のみならず、実唱（音声による復元）という観点を含めて明らかにしたい。同時代の講式作者としては明恵・貞慶などがよく知られるが、本講式の構成や内容から、澄憲がどのように式文を組み立てていったかが浮かび上がり、高度に優れた講式の作例として眺めることができる。また、この澄憲作七段式を改変したいいくつかの『如意輪講式』も今

に伝わっている。三段式（貞慶の作）、五段式といったバリエーションがあるが、その改作（およびその方法）からは、ひとつの講式が広く伝播していった形跡が具体的に辿られるのである。

貞慶の浄土信仰と仏道―講式を中心として―

楠 淳證

解脱房貞慶（一一五五―一二一三）は多仏信仰者であるといわれるが、それは三阿僧祇劫にわたって多仏に歴史するからであり、今生においては限られた尊者への「信」を示しているにすぎない。しかも、その本質は釈迦・弥陀・弥勒・観音の四尊に対する「浄土信仰」にあり、法相教学（論義）に基づく理論構築（思想）によって、順次生での浄土往生・見仏聞法を願って展開したものであった。これらの教義・思想に基づく信仰展開は、種々の貞慶関連文書において確認できるが、最も端的に示されたものが貞慶撰述の「講式」であったといつてよい。

『貞慶講式集』が刊行されて以降、貞慶の講式研究は大きく進展したが、中には「世間男女等のために書いたもの」や「貞慶に名をかりた偽撰の書」の指摘もなされるなど、不解明な部分も多々残している。それを解明するには、貞慶の教学・思想を確認する必要がある。そこで本発表においては、教学・思想に基づく貞慶の仏道理論を基準として、「講式」における貞慶の信仰のあり方を確認したい。

『神祇講式』と神楽・祭文世界―「講式研究のセカンドステージ」のために― 星 優也

『神祇講式』は、鎌倉後期には成立していた神祇を（本尊）に衆生救済を祈る講式である。『沙石集』や『中臣祓訓解』との関連が指摘され、また解脱房貞慶作とする言説とともに展開した。報告者は、前稿で『神祇講式』の流布と展開を追うことで、鎌倉期に成立した『神祇講式』が奥三河地域や薩摩地方の神楽（神舞）の祭文へと変貌することを明らかにした。本報告は前稿の成果を踏まえ、神楽をはじめ民間祈祷の世界で実践され、今に息づく『神祇講式』の世界を明らかにしたい。奥三河の大神楽と花祭、薩摩の藺牟田神舞、平戸、対馬、備後、美作、讃岐へ。おもに中部から西日本における事例を紹介する。本報告では、こうした『神祇講式』の地域的伝播にとどまらず、『神祇講式』が受容されることで、新しい祭文が作成されたことを紹介する。

本報告の意義は、『神祇講式』の地域的な広がりや定着を明らかにするとともに、各地域の民間宗教者に読まれたことにより、在地の儀礼に即したテキストへと読解されて変貌した過程を、『神祇講式』が創り出す歴史としてとらえる。この研究は『神祇講式』のみならず、『荒神講式』や『牛頭天王講式』など民間で読まれた講式の展開を追うことにより、講式研究の対象を拡大することになる。また「神々の講式」を中世神道研究との関わりで読み直す展望に向けられている。